

# 説明書

治療・検査の名称	開腹腎尿管摘除術、リンパ節廓清、膀胱部分切除術
----------	-------------------------

## 説明項目

### 1. 診断名（病気の名前と進行度）

腎盂癌 尿管癌

TNM分類：T      N      M     

ステージ：           

### 2. 病気の説明（どこに、なにがおきてどうなっているのか）

現在、みぎ ひだり 腎盂 尿管 に     cm の癌があります。

### 3. 目的および必要性（なぜこの方法が提案されたのか）

腎盂癌／尿管癌の標準的な治療法はガイドライン上腎尿管全摘除術であるとされております。

考えられる他の治療法

#### 放射線治療、化学療法

切除不能な腎盂癌／尿管癌に対しては適応になる事はありますが、手術にて摘除可能な場合は根治的治療としては不十分とされています。

#### 尿管鏡下レーザー焼灼術

low grade の腫瘍に対して行われる場合があります。片腎あるいは高度腎機能障害があり、病変のある側の腎臓を摘除する事で末期腎不全に陥る場合も適応になる場合があります。但し、根治性という観点からは標準化された治療ではありません。

#### 尿管部分切除術

low grade の腫瘍に対して行われる場合があります。片腎あるいは高度腎機能障害があり、病変のある側の腎臓を摘除する事で末期腎不全に陥る場合も適応になる場合があります。但し、根治性という観点からは標準化された治療ではありません。

#### 腹腔鏡下腎尿管全摘除術

我々の施設では、リンパ節廓清が必要な場合や腎周囲ないし尿管周囲への浸潤が疑われる場合は根治性の問題から開腹手術を推奨しています。

#### 無治療

腎盂癌や尿管癌は比較的進行が早く、悪性度が高い癌です。治療をしない事で、病状が進行する危険性があります。

#### 4. 方法（なにをどうするのか）

- まず側臥位の体位を取り、肋骨の先端から恥骨周囲まで切開します。視野の確保が難しい場合は肋骨を一部切除します。
- 腎臓周囲の臓器をよけて腎臓を露出します。その後腎臓の動脈、静脈の順に切離します。
- 副腎は（温存 非温存）の予定です。但し、手術所見で方針が変更する場合があります。
- 切除床を十分に止血します。
- 尿管を膀胱側迄剥離して、膀胱の接合部を切除します。
- 切除した膀胱部分を縫合閉鎖します。
- 所属リンパ節廓清（外腸骨、内腸骨、閉鎖、総腸骨、仙骨前面、傍大動脈、腎門部、大動静脈間、傍下大静脈）を行います。
- 手術した部分からの出血や滲出液を体外に出すために、ドレーンという細い管を傷の一つからおなかの中に入れて手術を終了します。ドレーンは入れないこともあります。
- 最後に創部を溶ける糸で縫合し、その上を医療用接着剤で覆いますので、抜糸の必要ありません。
- 手術時間は約 3～4 時間です。ご家族の方は病棟でお待ちいただき、手術が終了致しましたら、手術の経過についてご説明致します。

#### 5. 受けた場合の予想される経過（期待されること）

- 手術後は一般病棟に戻ります。心臓や呼吸合併症がある場合は、集中治療室で経過を見ることもあります。
- 翌日より、水分、食事が開始となります。できるだけ 1 日目から歩行も開始していただきます。
- 術後 4-5 日ぐらいで、尿道カテーテルとドレーンが抜けます。
- 抜糸の必要ありません。ほとんどの方が 3～4 日目で退院となります。

#### 6. 危険性および起こりうる合併症について（心配されることや副作用）

出血：出血量は多くの場合約 300ml です。しかし腎臓は血流が豊富な臓器で、一旦出血が始まると量が 多くなる可能性があります。輸血の可能性が 5%以下ですが、念のため輸血を準備して手術に臨みます。しかし出血量が 5000ml を越えるような大量出血になると、心不全、呼吸不全に至る可能性があり、集中治療室にて長期間にわたり治療を必要とする事もあります。

- 手術後、手術部位から出血し血腫を作ることがあります。保存的に止まる事がほとんどですが、出血量が多い場合や止血のために再手術が必要となることがあります。可能性は 5%以下です。
- 他臓器損傷：腫瘍との強い癒着等の理由により、胆嚢、脾臓、膵臓、腸などを術中に傷つける可能性があり、その場合にはそれらの臓器摘出を含め、適切に処置しなければなりません。手術中に損傷が判明した場合はこれを修復すれば問題はありますが、小

さな傷だと術後 2～3 日で腹膜炎、後出血、急性膵炎などがはつきりしてくることがあります。その場合に再手術が必要となりますが、可能性が 1%以下です。

- 術後の腸閉塞:術後に腸が癒着し、嘔吐、腹痛が出現します。多くの場合は自然に治りますが、まれに再手術が必要になることがあります。
- 術後感染症:手術創に感染があると傷がうまくつかず、傷の縫い直しが必要になることもあります。また肺炎、腹部に膿がたまる膿瘍などがあります。抗生物質により治療が必要となりますが、耐性菌がついたりすると全身に菌がまわる敗血症と呼ばれる重篤な状態となることがあります。
- 創ヘルニア:傷の下の筋膜がゆるんで、腸が皮膚のすぐ下に出てくる状態で、再手術が必要になることがあります、滅多におきません。
- 気胸:肺を包む胸膜に傷が付き、肺の周りに空気が入った状態です。胸部に管を入れる操作が必要になることがあります、滅多におきません。
- 術後肺梗塞:おもに足の血管の中で血液がかたまり、これが血管の中を流れて肺の血管を閉塞する、重大な合併症です。この合併症を予防するために、弾性ストッキング、下肢圧迫ポンプを使用します。術後もできるだけ早く歩行していただくことが大切です。発生率は約 0.1%といわれております。
- リンパろう:リンパ節廓清をした場合はリンパろうを来す可能性があります。その場合は食事を制限したり、ドレーンを長期に留置する可能性があります。また、リンパ還流が悪くなり下肢が腫れる場合があります。

#### 7. 合併症発生時の対処について（費用負担もふくめて）

項目 6 の欄に詳細に記載しております。費用に関しては、保険適応内の治療で対応します。

#### 8. 受けない場合の予測される経過、代替手段（他の治療法）

他の治療法については、項目 3 に記載しております。

#### 9. 説明内容の理解と自由意思による同意承諾およびその取り消しについて

いったん同意をされた場合でも、いつでも撤回することができます。やめる場合は、その旨を担当者へ連絡してください。

この手術に同意されるかどうかは、患者様の意思が尊重されます。同意されない場合でも、不利益を受けることはありません。

現在の患者様の病状や治療方針について、他の専門医の意見を聞くことも可能です。その際は、ご相談ください。必要な資料をご提供いたします。

#### 10. 緊急時等

考えられうる事態の対処法は、項目 6 の欄に記載しております。

#### 11. その他

予期されないような合併症が発生した場合は、適切に対応する様につとめます。

術者：

---

説明者

説明日：           年    月    日        施行予定日：        年    月    日

診療科名： \_\_\_\_\_ 説明医師氏名（自著署名）： \_\_\_\_\_